

子内親王・永福門院

竹西寛子

筑摩書房



竹西寛子（たけにし・ひろこ）

作家・文芸評論家。早稲田大学講師。

昭和四年広島生。早大国文科卒。著書

「往還の記」「儀式」ほか。

日本詩人選 14 式子内親王・永福門院

昭和四十七年七月二十日第一刷発行

著者 竹西寛子

発行者 井上達三

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八

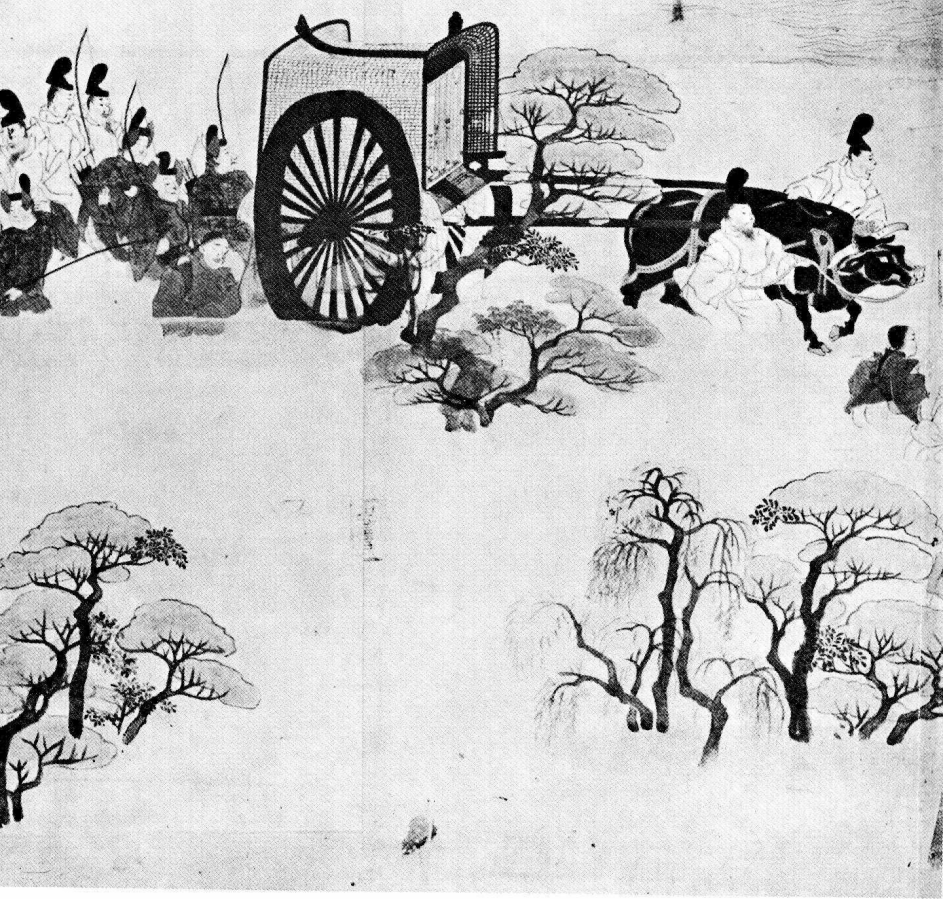
電話東京二九一―七六五一（代表）

振替東京四一三三郵便番号一〇―一九一

印刷 明和印刷 製本 鈴木製本

◎九七三 竹西寛子





関白賀茂詣 年中行事絵巻より

文庫
題

惠十甫

一番

巨勝

中將

ふふ人と思ふふふふふ
ふふふふふふふふふふ

右

從三位親子

勢度、物思ふこと何とこも
ふふふふふふふふふふ

二番

巨勝

永福門院内侍

ふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふ

右

新字同

ふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふ

式子内親王・永福門院和歌索引

式子内親王

暁のゆふつけ鳥ぞあはれなる長き眠りを思ふ枕に	63, 136
秋来ぬと萩の葉風にしられても春の別れやおどろかるらん	100
秋は来ぬ行方も知らぬ歎きかなたのめしことは木の葉ふりつつ	28
霰降る野路の笹原ふしわびてさらに都を夢にだに見ず	129
有明の同じながめは君もとへ都のほかの秋の山里	78
あはれあはれ思へば悲しつひの果忍ぶべき人誰となき身を	63
あはれとも言はざらめやと思ひつつ我のみ知りし世を恋ふるかな	61, 83, 89
いかにせむ夢路にだにも行きやらぬむなしき床の手枕の袖	130
生きてよも明日まで人はつらからじ此の夕暮をとほばとへかし	96, 103
今はただ心のほかに聞くものを知らずがほなる萩の上風	90
いまはただ寝られぬいをや歎くらん夢路ばかりに君をたどりて	100
浮雲を風にまかす大空の行方も知らぬ果ぞ悲しき	12, 26, 31, 94
うきことは巖の中も聞ゆなりいかなる道もありがたの世や	142
斧の柄の朽ちし昔は遠けれどありしにもあらぬ世をもふるかな	44, 48, 56
かへりこぬ昔を今と思ひねの夢の枕に匂ふ橘	129
神無月風にまかす紅葉ばに涙あらそふみ山べの里	27
君がへん千代松風に吹きそへて竹も調ぶる声通ふなり	54
桐の葉も踏み分け難くなりにつくり必ず人を待つとなけれど	72, 90
草枕はかなく宿る露の上を絶え絶えみがく宵の稻妻	67
雲のはて波間をわけてまぼろしも伝ふばかりの歎きなるらん	23, 99
恋ひ恋ひてそなたに靡く煙あらばいひし契の果とながめよ	97
恋ひ恋ひてよし見よ世にもあるべしといひしにあらず君も聞くらん	95
五月雨の雲は一つに閉ぢ果ててぬき乱れたる軒の玉水	67
しづかなる暁ごとに見渡せばまだ深き夜の夢ぞ悲しき	12, 63, 74, 88, 111, 124
しるべせよ跡なき波に漕ぐ船の行方も知らぬ八重の潮風	28
袖の色は人のとふまでなりもせよ深き思ひを君し頼まば	86~7
袖の上に垣根の梅はおとづれて枕に消ゆるうたたねの夢	129
絶え絶えに軒の玉水をおとづれて慰めがたき春のふる里	61, 67
尋ぬべき道こそなけれ人知れず心は馴れて行き返れども	61, 81
黄昏の萩の葉風にこのごろのとはぬ習ひをうち忘れつつ	89
頼みつる軒端の真柴秋くれて風にまかす霜の狭筵	27

頼むかなまだ見ぬ人を思ひ寝のほのかに馴るる宵宵の夢	89, 128
玉の緒よ絶えなばたえねながらへば忍ぶことの弱りもぞする	12, 62, 86
千たび打つ砧の音に夢さめて物思ふ袖の露ぞ砕くる	130
束の間の闇の現もまだ知らぬ夢より夢に迷ひぬるかな	128
つらしともあはれともまづ忘れぬ月日幾度めぐりきぬらん	52, 109
鶴の子の千度巢立たん君が代を松の蔭にや誰も隠れん	54
ながむれば我が心さへ果もなく行方も知らぬ月の影かな	28
ながめつるをちの雲居もやよいかに行方も知らぬ五月雨の空	28
ながめつる今日は昔になりぬとも軒端の梅は我を忘るな	105
にはひをば衣にとめつ梅の花ゆくへも知らぬ春風のいろ	28
はかなしや枕さだめぬうたたねにほのかにかよふ夢の通ひ路	52, 62, 80, 86, 126, 133~4
始めなき夢を夢とも知らずしてこの終にや覚め果てぬべき	128
時鳥そのかみ山の旅枕ほの語らひし空ぞ忘れぬ	109
ほのかにもあはれはかけし思草下葉にまがふ露も漏らさじ	62, 95
待ち待ちて夢か現か時鳥ただ一こゑのあけぼのの空	129
窓近き竹の葉すさぶ風の音にいとどみじかきうたたねの夢	12, 63, 74, 130, 133
みじか夜の窓の呉竹うちなびきほのかに通ふうたたねの秋	62, 134
見じことも見ぬ行末もかりそめの枕に浮ぶまぼろしの中	11, 22, 31, 52, 71, 87, 94
みちかはる別れはさてもなくさまし魂の行方をそことつくとも	99
身のうさを思ひくだけば東雲の霧間にむせぶ鳴の羽がき	142
深山辺のそことも知らぬ旅枕現も夢もかをる春かな	129
八重にはふ軒端の桜うつろひぬ風よりさきにとふ人もがな	77
山深くやがて閉ぢにし松の戸にただ有明の月やもりけん	61
山深み春とも知らぬ松の戸に絶え絶えかかる雪の玉水	61, 65, 73, 111
夢にても見ゆらんものを敷きつつうちぬる宵の袖の気色は	129~30
夢のうちも移ろふ花に風吹きてしづ心なき春のうたたね	129
我が恋は逢ふにもかへすよなくて命ばかりの絶えや果てなん	83, 95
我が恋は知る人もなしせく床の涙もらすな黄楊の小枕	62, 83~4, 96, 103
忘れてはうち歎かるる夕べかな我のみ知りて過ぐる月日を	12, 52~3, 62, 83, 85, 91

永福門院

秋風は軒端の松をしをる夜に月は雲居をのどかにぞ行く	146, 175
ありしよりもあはれは添ひて見しよりも憂さはまさるに思ひかねぬる	197
入相の声する山の陰暮れて花の木の間に出でにけり	174, 184

うきも契りつらきも契りよしさらば皆あはれにや思ひなさまし	197~8
大方の世は安げなし人は憂しわが身いづくにしばし置かまし	171, 198
大空の月よ何とて常ならんさしもすみ憂きこの世と思ふに	197
おとせぬがうれしき折もありけるよ頼み定めて後の夕暮	170~1
尾花のみ庭になびきて秋風のひびきは蜂の梢にぞ聞く	179
かくばかり憂きが上だにあはれなるあはれなりせばいかがあらまし	196
風に聞き雲にながむる夕暮の秋のうれへぞたへずなり行く	179~80
きりぎりす声はいづくぞ草もなき白洲の庭の秋の夜の月	146, 183
今日はもし人もやわれを思ひ出づるわれも常より人の恋しき	166
暗き夜の山松風はさわげども梢の空に星ぞのどけき	179
さざまにうき世を思ふ夕暮の袖と草葉といづれ露けし	194
さ夜深き軒端の峯に月は入りて暗き檜原に嵐をぞ聞く	146, 175
しをりつる風は籬にしづまりて小萩が上に雨そそぐなり	145, 174
そのままの夢の名残のさめぬ間に又おなじくは逢ひみてしがな	165
空きよく月さしのぼる山の端にとまりて消ゆる雲のひとつら	145~6, 175
立ちかへりこれも夢にて又絶えはありしにまさる物や思はむ	165
頼めぬば人やうきと思ひなせど今宵もつひにまた明けにけり	196
露しげき草葉の上は静かにて下には虫の声ぞ乱るる	180
つらきをば更にもいはず人心あはれなるにもものをこそ思へ	196
鳥の声松の嵐の音もせず山しづかなる雪の夕暮	184
はじめなく迷ひ初めける長き夜の夢をこの度いかで覚さん	165
花の上にしばしうつろふ夕づく日入るともなしに影消えにけり	146, 183
人やかはるわが心にや頼みまさるはかなき事もただ常に憂き	171
日に添へてうきふししげみ呉竹の世に経がたくもなりまさるかな	197
真萩散る庭の秋風身にしみて夕日の影ぞ壁に消えゆく	146, 183
群雲に隠れあらはれ行く月の晴れもくもりも秋ぞかなしき	197
群雀こゑする竹にうつる日の影こそ秋の色になりぬれ	146, 183
ものごとに愁へにもる色もなしすべてうき世を秋の夕暮	141, 194
山風の吹きわたるかと思ふほどに檜原に雨のかかるなりけり	182
山里の軒端に近き椎柴のしひてうき世にいつまでか経む	195
夕づく日岩根の苔に影消えて岡の柳は秋風ぞ吹く	187
夕づく日軒端の影はうつり消えて花の上にぞしばし残れる	147, 185
夕立の雲も残らず空晴れてすだれをのぼる宵の月影	147, 157, 162
宵々の夢の行方のあやしきや我が思ひ寝かひとの心か	165
われも人もあはれつれなき夜な夜なに頼めもやまず待ちも弱らず	171

目次

式子内親王

三

永福門院

一五

*

いま一章、和歌について

一〇一

式子内親王・永福門院和歌索引

式子内親王

一章

葵祭といえ、古くから勅使の立てられてきた上、下両賀茂神社の祭である。主催者は斎院というこの格式の高い神事が、政治の場あるいは物見遊興の場としても利用され、老若男女の心を動かした模様は、王朝の日記や物語にもよく記されている。冠、烏帽子、牛車などに葵桂を飾って、都大路や賀茂川のほとりを往く勅使、斎院の行列をただ一目拝みたいばかりに、はるばる遠国から上って来る者も数知れずあったという。

数十人の童子に殿上人を従え、金の漆を塗った網代車を仕立てて派手に行なわれた院の祭見物や、女君の物見車の場所争いは、葵祭、賀茂祭というところよく想い起される作品の中の光景であるが、考え方によっては、こうした例はまだ無邪気なもののうちといえるかもしれない。なぜなら、檜皮葺の棧敷にいて斎院の輿を待ち構えていた時の左大臣が、若宮を抱いて御簾をか

かけると、輿の帷から認めもしるしの扇が差し出され、翌日、齋院は「光いづる葵のかげを見てしかば年経にけるも嬉しかりけり」と改めてよろこびの歌を大臣に贈られる、そういう例になると、この大臣は若宮の外祖父であるだけに、事情はかなりこみ入ってくる。摂関政治の血の闇をどうしても連想してしまふ。棧敷に見張りを立てて輿で酒を汲み、祭の行列が近づくとあわてて棧敷にかけ上る人のことを記したのは中世の歌人であった。時代もここまで下ると、物見にもおのずから王朝とは異った雰囲気があったであらう。

主催者の齋院は齋王ともよばれ、かつては伊勢神宮に奉仕される齋宮と同じく、天皇の即位ごとに占いで定められる習慣であった。「延喜式」^{注一}は、未婚の内親王、ついで女王をその有資格者と決めている。卜定された齋院は、神の御杖代となるための三年の禊齋の後、紫野の野宮^{注二}に入られるが、賀茂祭の折の正式の賀茂神社参向^{注三}のほかは、おおむね朝夕この野宮にあっての遙拝であり、奉仕であつたらしい。後白河院の皇女式子内親王にも、約一年間の齋院生活があつた。

「賀茂齋院記」によると、式子内親王が怡子内親王につづいて第三^{注四}代齋院に卜定されたのは平治元年（一一五九）であり、次代の繕子内親王の卜定は嘉応元年（一一六九）となつている。式子内親王の齋院退下は、「皇帝紀抄」第七によると「嘉応元年七月二十六日。依^レ病退下」で

あった。ちなみに嵯峨天皇皇女有智子内親王を初代とする齋院は、式子内親王から四代後に、後鳥羽院皇女礼子内親王を第三五代として廢絶されている。

幾百年にもわたって読みつがれるほどの作品を書いた作者の生没が不明という例は珍しくないし、むしろその方がいいときえ感じる時もあるのに、一国の皇女の場合そうであるのはやはり残念なことと思われる。式子内親王のように、齋院にまで立たれていて不明というのはなおさらであるが、ここでは諸氏の推定に援けられて、その生年を仁平三年（一一五三）^{注五}か久寿元年（一二五四）頃、薨年を、「源家長日記」と「明月記」の記事によつて建仁元年（一二〇一）と推定する。

武力の時代を招ぶきつかけとなつた保元の乱（一一五六）は、内親王に、無論まださだかに印象されてはいなかつたと思う。しかし、三年後の平治の乱はどうであつたか。一人の幼女としてのありふれた望みもあつて不思議ではないのに、神への奉仕を拒めない内親王は、まず齋院として、退下後は前齋院として、撰関時代から武士の時代へ、平氏と源氏交替の世とともに生きられ、盛大に「千五百番歌合」の催された年、その歌合に先立って大炊御門邸の病床で静かに亡くなられたのであろう。その御生涯は、近衛、後白河、二条、六条、高倉、安德、後鳥羽、土御門と、天皇八代にわたっている。

さきの「賀茂齋院記」式子内親王の項には、「後白河院之皇女也。母從三位成子。季成之女。